２０１２／０７／１５　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：パウロの誇り３
聖書箇所：ローマ人への手紙　１５章１７－２９節

今日は、ローマ書１５章１７節のみことばから見て行きましょう。
１７節「それで、神に仕えることに関して、私はキリスト・イエスにあって誇りを持っているのです。」、パウロはここに彼自身の誇りについて話を進めます。彼はどのような誇りを持っていたのでしょう？彼が何を誇っていたのか？そのことがこのみことばの中に記されています。今日、私たちはそのことをごいっしょに見て行きます。
Ａ．パウロの誇り　　１７節
１．彼に与えられた宣教の働き
彼が最初に誇っていたことは、彼に与えられた宣教の働きです。彼自身に神ご自身が与えてくださった尊い働きを彼は誇っていました。というのは、この１７節のみことばを見ると、間違いなく、これは１６節のみことばを受けています。最初の接続詞「それで」ということばは前から続いていることが明らかです。また、１７節に出て来る「誇り」という名詞を見ても、パウロは敢えてこの前に冠詞を付けています。何のためですか？これが前のことばに掛かっていることを明らかにするためです。また同時に、１７節に「キリスト・イエスにあって誇りを持っている」と言ったパウロは、その前に「神に仕えることに関して、」と言っています。実際に、１７節のみことばを見たときに、この「仕える」ということばはギリシャ語には存在していません。これは文脈から補足されています。なぜ、こんなことをしたのか？１６節を見ると「キリスト・イエスの仕え人となるために、」とあります。ここでは、パウロ自身がキリスト・イエスに仕える者とされたと言っています。１７節はそれを受けている訳で、訳者は敢えて、「仕える」ということばを補ったのです。ですから、こうして見た時に、パウロが１７節で言わんとしていることは間違いなく１６節を受けて語っているのです。
１６節でパウロは何を語ったのか思い出してください。彼自身が異邦人の救いのために召されたこと、そして、その働きに対して、この語るメッセージに対して、パウロがそれらを誇っていたことを私たちは学んだのです。神が与えてくださった異邦人への働き、そして、託されたこの福音のメッセージ、これをパウロは心から誇っていました。別の箇所を見るとパウロはこのように言っています。Ｉコリント９：１６「というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならないことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわいに会います。」、パウロは福音のメッセージを誇り、それゆえに、彼は喜んでそのメッセージを語り続けていました。Ｉテモテ１：１２でもこのように言っています。「私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。」と、パウロが言ったことは、神が私に特別な務めを与えてくださった、この福音を伝えるという特別な務めをくださった。そして、神は私を忠実な者と見てくださっているということです。なぜなら、パウロ自身がその務めに対して忠実であったからです。そのことは私たちが「使徒の働き」を見た時に、どのように彼がこの福音のメッセージを語り続けて来たのか、そのことを見ることができます。
確かに、彼は忠実でした。この働きにおいて熱心でした。どうして彼はこの務めに対してこれほど熱心だったのか？言うまでもありません。それは主が罪人の救いをお喜びになるからです。一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない９９人の正しい人に勝る喜びが天にあると言われました。その通り、一人の罪人が罪を悔い改めて、主が備えられたこの救いを心から受け入れるならば、私たちも喜ぶし、何よりも主ご自身がそのことをお喜びになるからです。ですから、パウロはそのことを知っていたのです。主によって用いられることも嬉しいし、このすばらしい救いのメッセージを語ることもすばらしい。そして、何よりも、罪人がこの救いに与ることが私の愛する主がお喜びになる。だから、彼はそのことを思い、そのことを熱心に忠実に行ない続けたのです。
福音を語ることを喜んでいたパウロ、これはパウロだけのことではありません。あなたも私も同じです。私たち救われた者は同じ思いをもってこの福音宣教に励んでいるはずです。キャサリン・ハンキーという一人の女性がある讃美歌を書きました。私たちもよく知っている聖歌５２５番です。その中に、

「　語り継げばや、語るごとに、心満ち足り、楽しさ増す
　　この救い主知らぬ者に　我　呼びかけて、証しせばや
　　語り継げばや、世を去る日まで、語り継げばや、イエスの愛を　」

私たちはこの曲をよく賛美します。皆さん、歌詞をもう一度見てください。「語り継げばや、語るごとに、心満ち足り、楽しさ増す」と。問題は、私たちがそのように福音宣教をしているかどうかです。しかし少なくとも、主によって贖われた者たち、パウロと同じようにこの救いを感謝している者たちは、今の讃美歌に対して「アーメン」と言うでしょう。「私もこの福音を語ることを喜びとしています。私もこのイエス・キリストを心から誇りとしています。」と。

パウロはこのようなすばらしい務めに与ったことを誇っていました。

２．主イエス・キリスト

もう一つ上げるなら、彼は間違いなく主イエス・キリストを誇っていました。主イエス・キリストを心から誇る者でした。そのことをパウロはこのみことばを通して私たちに教えてくれます。もう一度、１７節のみことば見てください。**「それで、神に仕えることに関して、私はキリスト・イエスにあって誇りを持っているのです。」**とあり、「神に仕えることに関して、私は誇りを持っているのです。」とは言っていません。**「私はキリスト・イエスにあって誇りを持っているのです。」**と言いました。読者たちが間違えないように彼の誇りがどこにあるのかを明らかにするために、このようにパウロは記しました。

確かに、パウロは我々がよく知っているように、その働きにおいて熱心でした。至る所にあって彼はその機会を求め、機会を探りました。そして、キリストの福音を語り続けて行きました。しかし、彼自身それらのことを一つも誇っていません。「私はこれだけの働きをした」などとパウロが自分の働きを誇っているところを見ることは出来ません。恐らく、皆さんもお聞きになったことがあると思いますが、ある人は「私はこれまでに何人の人を救いへ導いた」とか、「どれだけ多くの人々に福音を語ったことか…」と自慢します。けれども、パウロは違いました。パウロは我々が想像することも出来ないほどの数の人々に、いのちがけで福音を語ったことでしょう。しかし、彼は彼自身が為した働きに関して一切誇っていません。彼の誇りは「キリスト・イエスにあって」です。すなわち、キリスト・イエスに対するもの、まさに「キリストが私の誇りだ」と彼は宣言するのです。

キリストを誇りとする人々、それはあなたです。そして、私です。つまり、キリスト・イエスによって救われた者たちは、大なり小なりみなこのイエス・キリストを誇りとする者たちです。ピリピ人への手紙３章を開けてください。パウロはそのことをこのように私たちに教えています。３：３**「神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。」**、**「キリスト・イエスを誇り、」**とあります。この「誇る」ということばは新約聖書の中に３７回出て来ますが、そのうちの３５回はパウロ書簡の中に記されています。パウロがどれ程このことばを好んで用いたかが分かります。つまり、人が大喜びで自慢している様子を表わすことばです。パウロはイエス・キリストのことが嬉しくてたまらない、イエスのことが彼の大きな自慢だったのです。自分の何か特別な持ち物を自慢している、そのような様子を思い描いてください。パウロはこのイエス・キリストを自慢していたのです。

そして、このピリピ３：３で言っていることは、本当に救いを受けた人のことです。「割礼」ということばが出て来ます。肉体的な割礼ではなくて心の割礼のこと、救いのことです。その救われた人の特徴がここに記されているのです。**「神の御霊によって礼拝をし、」**と言います。形だけの礼拝でなく心から神を礼拝する、それが救われている人の特徴であると言うのです。もう一つあります。**「キリスト・イエスを誇り、」**、キリスト・イエスに対する誇りです。救われている者は主イエス・キリストを誇る者たちです。

１）救われたキリスト者が主イエスを誇る/自慢するその理由

今、私たちが見ているピリピ３章を見ると、その答えをパウロは私たちに与えてくれています。パウロがどうしてイエス・キリストをここまで誇ったのでしょう？

（１）救いが主の恵みによることを知ったから

理由の一つ目は、救い、罪の赦しが神の恵みによるということを知ったからです。自分の努力によって救いを得るのでなくて、この救いは神の恵みによるということを知ったゆえに、彼はこの主を心から誇ったのです。彼がこの救いに与る前、誇りとしていたものは自分自身でした。５節、６節にそのことを記した上で、パウロは７節に**「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。」**と言い、８節では**「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。」**と、全く価値がない「ちりあくた、ゴミ、がらくた」だと言うのです。

なぜ彼は、自分の家系や、自分が宗教者としてこれまで一生懸命為して来た行ないを「がらくた、価値がない、ゴミだ」と言ったのでしょう？パウロは分かったからです。これまでは律法を一生懸命守り

行ないさえすれば罪の赦しをいただいて天国に行けると思っていました。ですから、彼は一生懸命、律法を守り行おうとして来ました。恐らく、彼自身、完璧に守り行なうことは不可能だということに気付いていたでしょう。でも、それを認めてしまうとそこに絶望が生じるので、そのようなことは考えないようにしていたのかもしれない。しかし、そのパウロにすばらしい神のメッセージが届くのです。それは「救いは信仰による」というメッセージです。そこで、彼はこのイエス・キリストを信じるのです。３章の８節後半と９節をご覧ください。「それは、私には、キリストを得、また、:9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」と、パウロ自身が変えられたのです。自分の努力によって救いを得るのではなくて、この救いは神からの一方的な恵みである、イエス・キリストを信じる信仰によって与えられる恵みであるということに彼は気付くのです。

ですから、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさゆえに、イエスを知ったことのすばらしさ、イエスによって罪赦されたことのこのすばらしさ、それと今まで自分が宝として来たものを比較した時に、比較などできないと言うのです。なぜなら、今まで自分が宝としてきた人間の努力や行ないは、自分が一番望んでいた救いをもたらすものではなかったからです。「今、私はこのイエス・キリストを信じる信仰によって、このすばらしい救いに与った」のです。ですから、パウロがこのイエス・キリストを誇りとしていたのは、この救いが主の恵みによって与えられる、主イエス・キリストが彼を信じる者に与えてくださるすばらしい祝福だということが分かったからです。

（２）本当の自分の姿を知ったから

また同時に、もう一つ上げるなら、彼がイエス・キリストをここまで誇っていたのは、彼は主によって自分の本当の姿を示されたからです。彼は本当の自分の姿に気付いて行くのです。Ｉコリント１章を見てください。非常に大切な箇所です。１：２７－２８「しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。」と、パウロはここに、自分がどのような存在であるのかを記しました。そして、自分だけでなくて、私たち一人ひとり、すべての人間が主の前にどのように映っているのか、その姿を明らかにしたのです。パウロは自分を正しく知ることによって、私は全く救われる価値のない人間であるということを告白するのです。

この箇所で見る五つ表現は救われた者に関する表現です。パウロはこのように自分自身を表現したのです。

・「愚かな者」＝「この世の愚かな者を選び、」、何のためにですか？「知恵ある者をはずかしめるために、」と言います。恐らく、知識において言うなら、パウロほど知識の豊かな人間はいなかったとも言えるでしょう。幾つもの博士号を持っていてもおかしくないような人物です。しかし、彼は言うのです、「私は愚かだ」と。なぜなら、世の知恵をもっては神を知ることがないからです。そのような知恵にどんな価値がありますか？どんなに知恵を積んで、たとえ、ノーベル賞をもらったとしても、その知恵は人を救わないのです。人間の愚かさは、知恵を得れば得るほど何か真理を発見すると言います。しかし悲しいことに、世の知恵をもって神を知ることはないのです。パウロはそのことに気付くのです。人間から見たなら「あなたは知恵がある。あなたは知識がある。」と言うかもしれない。しかし、彼自身は自分のことを正しく知っていました。「私は愚かな者です。私は生まれながらに神のことを何一つ知らなかった。真理について何一つ知らなかった。それが私だった。」と。

・「弱い者」＝「強い者をはずかしめるために、」私は弱い者だと言います。パウロは自分がいかに弱いかということに気付いたのです。なぜなら、自分はどんなに願っても自分のいのちを延ばすことも出来ないし、自分を変えることも出来ないし、自分を救うことも出来ない。今日は元気でも明日いのちを落とすかもしれない、自分の弱さに気付いているのです。

・「取るに足らない者」＝重要ではない、私は劣った者だと。

・「見下されている者」＝軽蔑という意味です。だれかが自分の本当の姿を見たら、私は軽蔑に値する者だ、それ程私の心は荒んでいるし酷い、罪に汚染されている、そのような本当の姿を彼は見るのです。

・「無に等しいもの」＝そして、最後のことばを見てください。先の四つのことばはすべて、漢字の「者」です。人を指します。ところが最後は「無に等しいもの」とひらがなで書かれています。この新改訳聖書の訳者は敢えてこのように区別をしたのです。なぜなら、最後のことばの意味が、ここをひらがなにすることによって明らかになるからです。どういう意味でしょう？これは直訳すると「存在していない」という意味です。つまり、存在していないのに等しい存在、人間以下の存在、そういうことを言

っているのです。私は存在に価しないものだと言うのです。実は、こういう表現はこの当時使われていたのです。どのような人に対して使われていたかと言うと「奴隷たち」に対してです。
　ローマ帝国には、この当時６千万人の奴隷がいたと言われています。奴隷は人ではなかったのです。彼らは「もの」だったのです。皆さんは必要でなくなったものを粗大ゴミで出しますが、きちんと法に基づいて出せばだれかが文句を言う訳では有りません。この当時、主人が自分の年老いた奴隷を「もの」と同じように捨ててもだれ一人文句を言いません。奴隷を痛めつけても苦しめても、殺しても何をしてもだれ一人文句を言わなかったのです。なぜなら、奴隷は人間ではなくてものだからです。パウロはその表現をここで用いるのです。「私は生きる価値もないほど愚かな存在だ」と、あのパウロがこの様に自分自身のことを表現するのです。どれを取ってみても悲しくなるようなことばかりです。ここを見て、自慢できるようなものは全くありません。パウロは知っていたのです。私のどこを見ても神の前に誇れるものは何一つないと。そして、パウロはこのように言って、実は、このような姿の私が神の目に映っていることを知っていたのです。
　信仰者の皆さん、私たちが考えなければいけないことは、神はあなたの心のすべてを見ておられるということです。あなたがことばを発する前に、神はあなたの心をあなたの思いを見ておられます。その神があなたを見て、あなたのどこにあなたの良さを見出しますか？神をほめ称えているそのときでも私たちは別のことを考えてみたり、神の前に祈っているのにその祈りの中に別の思いが入ってきたり、神に仕えると言いながら他のことを考えてみたりと、あなたもきっと自分の罪深さに気付いておられるでしょう。そして、そのことに気付くほどに私たちは思うのです。「私は何という人間なんだろう…、何と酷い人間なんだろう」と。感じませんか？神の前に立つこと自体がもう私には出来ない、どこか隠れることができたなら…と。だから、私たちが覚えなければいけないことは、あなたが特別な人間だから神はあなたを救ったのではないということです。あなたがだれかに比べて勝っているから神はあなたにあわれみを掛けたのではないということです。このような存在として神の目に映っていたあなたや私、でも、そんな私たちを神はあわれんだのです。
　２７節と２８節のみことばを見てください。「選び」ということばが３回も出て来ます。あなたがこの救いに与ったのはすべて神の選びだったのです。すべて、神があなたを選んでいてくださっていたからです。人間的に見るなら、いろいろなことを誇ることの出来たパウロ、しかし、彼は何一つ誇ることなく、自分を含めてすべてのクリスチャンたちをこのように表わしました。
・パウロはなぜ、クリスチャンのことをこのように表現したのでしょう？
　彼が答えを与えてくれています。２９節「これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。」。
（１）「神の前に誇れるものが自分には何一つないこと」を思い起こさせるため
（２）「救いは純粋に神の恵みのみわざであること」を思い起こさせるため
　皆さん、私たちが本当の自分の姿を知れば、私たちは自分を誇ることを止めます。自分の姿を正しく知れば、そんな私をこんなにもあわれんでくだったお方、この方だけを誇ろうとします。だから、３１節にこのように書かれています。「まさしく、「誇る者は主にあって誇れ。」と書かれているとおりになるためです。」と、つまり、神を心から誇るためには、私たちは自分がどれほどこの祝福に与る資格がない者であるかに気付かなければいけないのです。パウロは自分の本当の姿を知って自分を誇ることを止めたのです。かつての彼はそうでした。彼は自分を誇っていました。自分の家系を教育を宗教心の熱いことを誇っていました。人間的に「その通りだ」という様々なことを彼は誇っていました。しかし、自分の本当の姿を見た時に、そして、どうにもならない、イザヤが言うように「汚れた衣のように」、もう捨てるしかない、そのような者であるということに気付き、そんな自分を神が一方的に選んでくださり、救いへと招いてくださったことを知った時に、彼が言ったことは「私の誇りはただ一つ、このイエスだけだ。」です。こんな私をこれ程にもあわれみ、こんな私にこのようなすばらしい祝福をくださったと。皆さん、気付いていますか？私のうちには神の前に誇るものは何一つないということを、そして、私がこのようなすばらしい祝福に与っているのは１００％すべて神の恵みだということを。あなたを選んだのは神なのです。あなたを救ってくれたのは神なのです。
　ですから、この箇所を見ても、パウロはイエス・キリストを誇りとしていたことを記しています。それは、神が私をこのように祝してくださったからです。この救いは神の恵みだということを知っていたからです。もう一度、今日のテキストに戻ってください。
Ｂ．救いのみわざ　　１８－１９節
　１５章１８―１９ａ節にこのように記されています。「私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行ないにより、:19 また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくだ

さいました。」、パウロはこの１８節から「救いのみわざ」について話を進めます。「私はイエス・キリストを誇っている」と語ったパウロは、主の救いのみわざに関してより詳しい説明を１８－１９節に加えています。

１．救いは神のみわざ　　１８節

「キリストが異邦人を従順にならせるため、」とは救いのことです。ローマ１：５を思い出してください。「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです。」と記されています。ここに「信仰の従順」ということばが出ています。これは救いのことです。救われた人たちは神に対して従順に生きる者たちです。なぜなら、かつての私たちは神に背を向けて逆らって来たからです。その罪を悔い改めて神に従うことを私たちは選択したのです。ですから、そのように選択し、そのように救いに与った者たちは、神に従う歩みを継続して行なう者たちです。主に対して従順に歩む者たちです。ですから、みことばを見ると「キリストが異邦人を従順にならせる」と書かれています。異邦人が神に対して従順になって行く、だれのみわざですか？「キリストが」とあります。主イエス・キリストがこのような救いを人々にもたらすのです。しかも、１９節に「それを成し遂げてくださいました。」とあります。何を成し遂げてくださったのか？救いを成し遂げてくださったのです。だれがなしたのか？「キリストは、」と書かれています。ですから、明らかにパウロは、この救いは神のみわざだということを教えています。

Ⅱテモテ１：９に「神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、」と記されています。神は私たちを救ってくださった、つまり、「聖なる招きをもって」私たちを救いへと召してくださったと。しかし、「それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。」と、神が私を救ってくださったとそのようにパウロはこの箇所でも教えています。ですから、まずパウロは１８節で「救いは神のわざだ」と、確かに、私は異邦人に伝道するために召された、しかし、彼らを救ったのは神ご自身のわざなのだと言います。

２．宣教も主のみわざ　　１９節

救いだけでなく、実は、彼が行なった宣教の働きも神のみわざであると言います。ですから、１８節の後半から１９節に「…キリストは、ことばと行ないにより、:19 また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。」と記しています。ここに記されていることは確かに救いです。そして、その救いに至るためにパウロ自身が為した宣教の働きのことです。パウロはすべて神のみわざであったということを言わんとしているのです。パウロがエルサレムへ戻ったときのことが使徒の働き２１章に書かれています。パウロはエルサレムにいたヤコブのところに出かけて行きます。そこにヤコブとともに長老たちがいたことが記されています。２１：１９を見ると「彼らにあいさつしてから、パウロは彼の奉仕を通して神が異邦人の間でなさったことを、一つ一つ話しだした。」とあります。情景が見て取れます。長老たちがいる前でパウロは宣教の報告をするのです。「パウロは彼の奉仕を通して神が異邦人の間でなさったことを、」と、パウロは神が為さったことを報告したのです。ですから、人を救う神のみわざと、同時に、この宣教においても、神が彼を用いて働きをしたのです。そのことが１８節の後半から１９節に書かれているのです。

◎パウロはどのように伝道したのか？

（1）ことばと行ない

主なる神はパウロの「ことばと行ない」を用いて働きを為されたということです。パウロという人物の姿がここに見えます。パウロという一人の信仰者はどのように伝道したのか？彼は確かに、ことばをもって主イエス・キリストの福音を語りました。もう一つ言えることは、彼は自分の生き方をもって福音を語ったのです。だから、パウロはここに「ことばと行ない」と言ったのです。皆さんもよくご存じのように、行ないはことば以上に力を持っています。証の力を持っています。どんなことでも言えますが、問題はどのように生きているかです。

よくご存じのように、ペテロのみことばの中に妻たちに対する教えがあります。ご主人が救われていないケースです。みことばに従わない夫であってもこのように教えています。Ⅰペテロ３：１－２「同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。」、つまり、妻の無言のふるまい、妻の行ないによって、彼らが信仰へと導かれるということをペテロは言っているのです。その続き「:2 それは、あなたがたの、神を恐れかしこむ清い生き方を彼らが見るからです。」、「妻のことばを聞く」からではなく「妻の生き方を見る」からです。これは妻だけに言えることではありません。私たちすべてに言えるのです。私たち一人ひとりが「神を恐れかしこむ清い生き方」をしているなら、人々はあなたを通して神ご自身を

見るのです。なぜなら、行ないはことば以上に力があるからです。何度も言うように、「喜び」のことを話していてあなた自身が喜んでいなかったら、あなたの語っている喜びは偽物ということはすぐにバレます。あなたが平安を語っていてもあなたのうちに平安がなかったら、あなたの語っている平安は偽物だとすぐに見破られてしまいます。私たちに必要なことは、このパウロがそうだったように、ことばと行ないによってキリストの証をすることです。感謝なことに、神がそれを為してくださいます。

その説明をします。マタイの福音書５章を開けてください。山上の説教のメッセージの中で１６節のみことばですが、主イエス・キリストご自身が、今パウロが教えていることをこのように教えています。５：１６「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」、こうして見ると、あなたがたの光を人々の前で輝かせることと、人々があなたがたの良い行ないを見ることは非常に関連していることにお気付きになると思います。見ていただきたいのは結果です。どのような結果を期待しているのでしょう？「人々が…あなたがたの父をあがめるようにしなさい。」、主がお教えになったことは、結果的に人々が私たちの父なる神をほめ称えるようになる、そのようなことが起こるように次のことを為して行きなさいと言うのです。「あなたがたの光を人々の前で輝かせ、」とは何のことでしょう？確かに、５：１４を見ると「あなたがたは、世界の光です。」と言われています。つまり、あなたたちは世にあって証をするのです。「光」を世に証して行くのです。「光」とはだれですか？ヨハネの福音書８：１２、９：５に書かれています。「わたしは、世の光です。」と、「わたし」とはだれですか？神です。ですから、神によって救われた私たちは、光である神を世の中に明らかにして行くのです。そのために「あなたがたは、世界の光です。」と言われたのです。あなたたちはその光の光源ではありません。光のもとではないのです。光である神のすばらしさを世に証して行くこと、それが私たちの務めなのです。

では、その光を人々の前で輝かせるにはどうすればいいのでしょう？主が言われたように「人々があなたがたの良い行ないを見て、」、行ないです。思い出していただきたいのは、あなたが主の恵みによって救いに与ったその時から、主の働きがあなたの心の中で始まったことです。あなたを主に似た者に変えるという働きです。私たちが主ご自身を覚える時に、愛・喜び・平安・寛容・親切・善意・誠実・柔和・自制、この九つにおいて完全であられた主イエス・キリスト、その方に似た者へとあなたを変えていくという働きを、あなたに内住している光である神がその働きを始められたのです。ということは、愛において神はあなたを変えて成長させてくれるのです。神を愛する者に、隣人を愛する者に、人の罪を赦す者に、そうして神の愛を実践する者へと我々を変えていってくださる。喜びにおいても、主ご自身の喜びをもっていつも喜ぶことが出来る者へとあなたを変えていってくださる。平安も、神の平安を与えられた者としてその平安をもって生きる者へとあなたを変えていってくださるのです。そのようにして神はあなたをキリストに似た者へと変えていくのです。そして、その変化はあなたの心の中だけに起こるのではないのです。あなたの心が変われば何が変わりますか？行ないが変わって行きます。あなたの心の中に神に対する愛が増し加わって行くならば、その神に対する愛というのは形となって出て来るのです。心にあるものが外に出てくる訳です。ということは、今、私たちがこのマタイ５章１６節を見た時に、光である神があなたのうちにいてくださり、その光である方があなたを通して良い行ないを生み出して行くということです。だから、人々はあなたの良い行ないを見た時に、その良い行ないをしているあなたよりも、その良い行ないをあなたのうちに生み出している神を見るのです。そして、人々は神を崇めるのです。そのような働きを神はあなたを通して為すと言うのです。

◎では、その働きを為していただくために何が必要か？

・神に変え続けていただくこと：主に従うこと

あなたが変えられていくことが必要です。あなたを変えてくださる神にあなた自身を委ねて、その方によって変えられ続けて行くことが必要です。Ⅱテサロニケ１：１１「そのためにも、私たちはいつも、あなたがたのために祈っています。どうか、私たちの神が、あなたがたをお召しにふさわしい者にし、また御力によって、善を慕うあらゆる願いと信仰の働きとを全うしてくださいますように。」

・みことばによって成長し続けること：学び、従うこと

Ⅱテモテ３：１６で「聖書は神の霊感による」と教えられた後、１７節に「それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」とあります。つまり、みことばによって成長するということです。聖書を学び、聖書を実践することによってあなたは変えられていくのです。そして、あなたが変えられることによって、あなたの内側から良い働きが出て来るのです。そして、人々はその働きを生み出している神をあなたを通して見て、あなたを通して知って、この方を崇める者へとなって行くのです。

パウロの歩み、彼はことばにおいて、そして、行ないにおいてキリストを証しました。なぜなら、彼は主に忠実に従い続けていたからです。神は彼を大いに祝して、キリストに似た者に変え続けて、そして、彼からすばらしい良い行ないが生まれていくのです。そして、人々が彼のことばを聞き、彼の生き方を見て、その主を崇める者になって行くのです。それと同じことを神はあなたにしようとしているのです。キリストがこのような働きをパウロを通して為したのです。パウロが偉かったのではないのです。パウロをこのように変えて用いた神がすばらしいのです。そのことをパウロは言っているのです。自分を自慢しなかったのです。「私のことばを聞いてください。私の行ないを見てください。私をこのように変えてくださった神を見てください。この方が誉められるべきです。」と。

（2）しるしと不思議をなす力　　１９節

「また、しるしと不思議をなす力により、」と、これは奇蹟のことです。新約聖書が書き終えられていなかった時に、この人たちが語ったメッセージが、この福音が神のメッセージであることを証明するために、このような奇蹟が伴いました。「使徒の働き」からみことばを見ましょう。

２：２２＝「神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと、不思議なわざと、あかしの奇蹟を行なわれました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。」

２：４３＝「そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって、多くの不思議なわざとあかしの奇蹟が行なわれた。」

４：３０＝「御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。」

５：１２＝「また、使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議なわざが人々の間で行なわれた。みなは一つ心になってソロモンの廊にいた。」

１４：３＝「それでも、ふたりは長らく滞在し、主によって大胆に語った。主は、彼らの手にしるしと不思議なわざを行なわせ、御恵みのことばの証明をされた。」

そのしるし、奇蹟を見た時に人々は驚いたのです。だから「不思議」なのです。どうしてこんなことが起こったのだろう？と。「しるしと不思議」と記されています。神はこのように奇蹟を行なうことによって、彼らのメッセージが神からのものであることを明らかにしたのです。使徒１５：１２をご覧ください。「すると、全会衆は沈黙してしまった。そして、バルナバとパウロが、彼らを通して神が異邦人の間で行なわれたしるしと不思議なわざについて話すのに、耳を傾けた。」とあります。

（3）御霊の力　　１９節

１９節の続きに「さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。」とあります。聖霊なる神がパウロとともに働いたのです。Ｉコリント２：４に「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。」とあり、聖霊なる神がパウロを祝してパウロを用いたのです。そして、神のみわざが為されたのです。

このように見た時に、皆さん、思いませんか？だから、パウロはイエスを誇ったのだと。「私ではない。私を救ってくださったのも神の恵みだし、私を用いてくださったのも神の恵みだ。こんな愚かな私を神はこのように変え続けて、そして、このように神の栄光のために私を用いてくださっている。感謝です、神さま。そして、私が誇るのはもうあなたしかありません。あなただけが私の誇りです。」と。パウロと同じように、あなたも神が用いてくださる神の道具です。神はあなたを救ってくださり、神はあなたを用いようとしてくださり、そして、あなたに必要なすべての恵みを与えてくださるからです。信仰者の皆さん、もう一度あなたの主を見上げてください。主が何を為してくださり、何を為してくださっているのか？恐らく、その時にあなたもパウロと同じように「私の誇りはイエス・キリストだ。」と言って、このイエス・キリストを大喜びしながら、イエス・キリストを心から誇りながら、この方のすばらしさを一人でも多くの人に知ってもらうために今日からまた歩んで行かれると、そのように確信します。そのような歩みをもってこのすばらしい主を証してください。

《考えましょう》

１．どうしてパウロは、自分のことや、働きを誇ろうとしなかったのでしょう？
２．主がパウロを用いられたのは、どうしてだったと思いますか？
３．どうして「主への従順」が救われた人の特徴なのでしょう？
４．主はパウロの「ことばと行ない」を用いて働かれたとありました。どうして主は「行ない」を用いられたのでしょう？
５．主が今日、あなたに教えてくださったことは何でしたか？